

アジア・太平洋研究センター主催、国際地域文化研究科共催講演会

シリーズ講演会「アジア・太平洋研究センター開設 20 周年記念シリーズ
『変容する国際政治経済秩序のなかでのアジア太平洋地域を考える』」

日 時：2025 年 11 月 21 日（金）

場 所：南山大学 Q 棟 5 階 51, 52 会議室

テーマ：植民地期台湾における日本仏教の布教活動——「廟」の中に「寺」を，
「寺」の中に「廟」を——

報告者：松金公正氏（宇都宮大学教授）



講演の概要

本講演会は、宇都宮大学教授である松金公正氏に來学いただき、松金氏の長年の研究テーマである植民地期台湾への日本仏教の布教活動について、戦後から現在にかけての影響や変化という点も含めて、最新の知見をご報告いただいたものである。当日は、多くの写真や地図、グラフなど多彩で豊富な資料も紹介いただきながら報告がなされた。以下、その概要について述べていく。

まず冒頭で今回の講演について、講演の副題にひきつけながら、台湾の土着の宗教施設である「廟」の中に日本仏教の宗教施設である「寺」が勢力を伸ばしていこうとした動きと、戦後の台湾において「寺」の中に「廟」を再建していこうとした動きを考えるとというテーマが興味深く説明された。その上でまず植民地期の台湾において、どのような形で日本仏教が布教を開始したのか、その後どのように広がっていったのか、布教対象であった「本島人」（台湾在来の漢民族の人々）そして「内地人」（日本

から台湾に渡った人々)にどのように関わっていったのか、これらの点についての概要が明確に示された。

その上で、具体的には布教使と呼ばれた日本から台湾に渡った仏教関係者が、台湾社会に布教を行っていく際、その重要な要素として社会事業の展開があったこと、その社会事業とは職業紹介などの「就職支援」、語学教授などの「教育」、日曜学校などの「教化」、釈放者保護などの「補導」、医療保護などの「医療」と多岐にわたるものであったことが、仏教宗派ごとの統計資料などとともに詳細に説明された。次に植民地期に各仏教宗派の台北における拠点、大谷派の東本願寺、真言宗の弘法寺、本願寺派の西本願寺、日蓮宗の法華寺などがどこに置かれたのかが、植民地都市の構造に関連づけて説明され、さらに戦後、それらの場所がどのように変化していったのかが多くの写真や地図とともに具体的に論じられた。

そして植民地期に寺院、説教所などの布教拠点は台北以外にも台湾の各地に設置されていくことになるが、その分布がどのように変化し、さらに信徒数がどのように変化したのかが、特に大谷派を中心にグラフや地図などを駆使して詳細に説明された。また、このような植民地期台湾の仏教史研究を進めてきた3つのアプローチ、すなわち①中国近代史研究、②日本近代史研究、③台湾史研究における研究状況が紹介され、それらの研究において通説的な理解となってきた3つの観点、すなわち①植民地台湾における日本仏教の布教活動は「内地人」を中心としたものであり、「本島人」の信徒を基本的には獲得することができなかった。②植民地支配と密接な関係があり「同化」、「教化」、「皇民化」の一翼を担った。③戦後布教使たちが引き上げることによって断絶した。以上の3点の通説的理解に対して、批判的検討が加えられた。

その上で、植民地期台湾での布教活動について、真言宗を例に、布教使・小山祐全およびその弟子の布教活動の軌跡と、1937年の日中戦争開始以降の真言宗の「本島人」信徒の増加という状況との関連性が、在来寺廟への働きかけという観点（「廟」の中に「寺」という観点）も含めて論じられた。さらに台北の真言宗の拠点であった弘法寺が、戦後、弘法寺の空間的な構造や地域社会との構造的関係性を活かしつつ台北天后宮として使用されていく過程（「寺」の中に「廟」という過程）が、写真や地図などを駆使して詳細に説明された。

そして最後に植民地期の台湾における日本仏教の布教活動には、教団、台湾総督府、布教使という3つのアクターが重なり合いながらも少しずつ異なる価値観で関わっていた点、およびこの3つのアクターと布教の対象としての「本島人」「内地人」との関係性も時期により少しずつ変化した点を丁寧に論じていくべきであり、そのためには「重層的な植民地経験」という観点からの分析が重要という興味深い指摘が行われ、報告は締めくくられた。

(文責：松田 京子)